

1950年代の大学図書館における西洋古刊本の修復

その他のタイトル	Restoration of Western Rare Books in University Libraries in the 1950s
著者	床井 啓太郎
雑誌名	東京大学経済学部資料室年報
巻	10
ページ	24-36
発行年	2020-03-31
URL	http://doi.org/10.15083/00079157

1950年代の大学図書館における西洋古刊本の修復

床井 啓太郎

1. はじめに

図書館等の資料保存の現場において、原形保存の重要性が強調されるようになって久しい。国際図書館連盟（IFLA）が1979年に作成した『資料保存の原則』は、86年版、98年版と二度の改訂を経て、事後的な対処から予防的な対策へ力点を移したが、わが国では、資料の原形・オリジナリティを保持する「原形保存の原則」が、資料修復における最も中核的な概念として定着した¹⁾。資料保存の実際において、原形保存をどこまで実施するかは、資料の性質や保存ニーズ²⁾等を勘案して検討されるが、西洋古刊本³⁾を含む古典籍、貴重書類は、現物を残す保存ニーズや原形保存の必要性が特に大きい資料といえる。

西洋古刊本の原形保存においては、資料のどの時点の状態を保存すべき原形とみなすかがしばしば問題となる。出版から長い年月を経て、複数回の修理や改装を受けていることが少なくない古刊本は、その判断により、どの部分を取り除き、どの部分を残すかという修復の形が大きく変わるからである。また、判断の前提として、その資料が過去に受けた修理や改装の様態を正確に把握することが不可欠となる。

日本の大学図書館で所蔵する西洋古刊本は、明治、大正期に将来され、国内で既に100年以上保管されているものも少なくない。こうした資料には、第二次大戦前後に一旦劣化のピークを迎えて、国内で修復処置を受けたものも含まれる。当時、洋装本の解体や再製本を伴う修理は、注文者の好みに応じた製本や仕立て直しを専門に行う諸師（もろし）と呼ばれる製本技術者が行うことが多

かったが⁴⁾、彼らの修理の実態についてはこれまでほとんど明らかになっていない⁵⁾。

そこで本稿では、1950年代に一橋大学で行われた西洋古刊本の修復事業を例にとり、資料の修理痕を分析することにより、当時の製本技術者による資料修復の実態を考察したい。

2. 一橋大学所蔵西洋古刊本の修復事業について

一橋大学は、森有礼が1875年に開設した商法講習所をその起源とする。以来、商業学校から商科大学を経て、戦後の一橋大学へとつながる歴史のなかで、数多くの洋書を蔵書として蓄積してきた⁶⁾。これらは出版から年月を経て経年劣化が進むとともに、その一部は第二次大戦中に木箱に詰められ疎開先との往復を経験したことで、1950年代初頭には革装の古刊本を中心に、破損や劣化が看過できない状態となっていた。

戦後、劣化した洋書の修理は散発的に続けられていたが、1954年1月に文部省からメンガー文庫を対象とする古書修理費特別予算170万円を配分する内示を受けて、本格的な修復事業が開始されることとなった。1954年11月にギールケ文庫修理費として100万円、1957年1月に左右田文庫、三浦文庫修理費として72万7千円の予算が追加で配分され、これらについても修理が行われることとなった。また、同時期に校費を用いて、一般貴重書に含まれる洋書の修理も進められた⁷⁾。

この時期の修復事業に関連する事務書類として、「製本簿」（写真1）、「貴重書製本控」（写真2）が社会科学古典資料センターに残されている⁸⁾。

製本簿は、文庫修復事業ごとに記載が分けられており、発注単位で、納品日、業者名、冊数、金額および業者ごとの累計金額が記録されている。また備考には、単価と冊数が書き込まれており、金額の内訳を知ることができる。貴重書製本控は、業者ごとに3つのパートに分けられており、資料単位で、発注日、納品日、請求記号、点数、金額が記載されている。つまり、製本簿は発注および支払いリストであり、貴重書製本控は修復資料リストの役割を果たしているといえる。

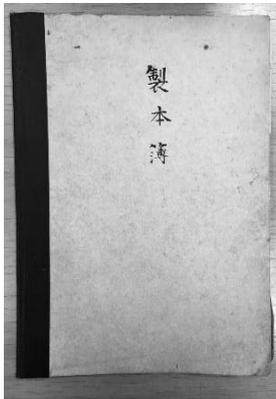


写真1



写真2

製本簿のメンガー文庫修復事業の項目には、業者名として中林、荒井の名が記載されている。ギールケ文庫の項目には、中林、荒井に加え谷川、左右田文庫および三浦文庫の項目には、中林、荒井、谷川のほか岩井の各業者名が記載されている。また、貴重書製本控は、貼付されたインデックスによって中林、荒井のパートに分けられているが、それ以外に無記名のインデックスが貼られたパートが存在する。この無記名のパートは、記載資料の修復箇所にある箔押のサインや、『一橋大学附属図書館史』の記述等から、製本技術者の服部政祐が作業を担当したと考えられる。また、製本簿で荒井が受注者となっている資料のうちメンガー文庫の記載分は、服部が実際の作業を行っている可能性が高い⁹⁾。

書類に記載されている業者のうち中林は、大阪の製本業者である中林安右衛門である。丸善系列

の製本所で製本技術を学んだのち、中林製本所(現ナカバヤシ株式会社)を開業して、大阪大学附属図書館の製本を手掛けたことで知られていた。一橋大学の事業のために、弟子2、3人を連れて上京し、附属図書館の地下室に製本道具や寝具等を持ち込んで、泊まり込みで仕事に当たったという¹⁰⁾。

荒井は、東京大学附属図書館で製本や修理を請け負っていた荒井鎮六である。技術職員として図書館に就職後、腕を買われて製本技術者として独立した人物で、附属図書館の地下に荒井製本所を開いて学内の製本や修理を一手に引き受けていた。一橋大学では以前から貴重書の製本を荒井に発注することがあり、その関係もあって修復の依頼をしたものと考えられる¹¹⁾。

服部は、帝国図書館から宮中へ献上する総革装本の装丁を任されるなど、わが国における諸製本の第一人者として知られていた。貴重書修復の技術も高く評価されており、一橋大学で約1年にわたって修復作業に従事したのち、東京大学経済学部でアダム・スミス文庫の修復を2年半かけて完成させている¹²⁾¹³⁾。

これらの製本技術者たちは、対象となる資料、すなわち、印刷した紙葉を折り畳んで折丁にし、それらを糸で綴じ、表紙と接続した上で革やクロスなどで装丁をし、場合によっては箔押などで装飾を施し製本された西洋古刊本を、1点ずつ補修し、あるいは解体した上で再製本を行うことで劣化部分や破損部分を修理していった。

3. 修復調査

修復事業における修理の実態を知るために、資料の修理痕の詳細な調査を行った¹⁴⁾。調査対象として、貴重書製本控で請求記号が判明している資料から97点を無作為に抽出した。なお、抽出の際に、製本技術者ごとの手法の違いを比較できるよう、中林、荒井、服部の担当した資料がそれぞれ

れ 30 点前後になるように調整した。資料の内訳は、97 点のうち 86 点がメンガー文庫、11 点が一般貴重書¹⁵⁾に含まれる資料である。また、資料の出版年代は、19 世紀以降が 30 点、18 世紀が 42 点、17 世紀が 20 点、16 世紀が 2 点、不明が 3 点であった。

資料の情報は、1 点ごとに「洋書修理痕調査カルテ (図 1)」(以下「カルテ」)に記録した。カルテには、請求記号等の基本情報のほか、表紙、背、とじ、見返し、のど、中身の部位ごとに、構造と材料、修理の有無と劣化状態を記録できるようにした¹⁶⁾。特に表紙と見返しについては、元の材料をどの程度残しているかを基準に、いくつかの特徴的な修理のパターンを区別して記録できるようにした。

以下、調査結果に基づいて、製本技術者ごとに修復の特徴を考察する。

(1) 服部修復資料

服部修復資料の調査点数は 38 点である (表 1-1)。資料の出版年代は、19 世紀以降が 6 点、18 世紀が 23 点、17 世紀が 8 点、16 世紀が 1 点となっている。

服部の修理は、表紙の修理のパターンを基準に 4 つのグループに分けることができる。すなわち、①表装全体を新規の材料で作直しているもの (以下「①全交換」)、②作り直した後に元の表装を貼り付けたもの (以下「②全交換+元表装」)、③表装を部分的に修理しているもの (以下「③部分修理」)、④修理をしていないもの (以下「④修理なし」)である¹⁷⁾。それぞれのグループについて、出版年、構造、綴じ直し¹⁸⁾、見返し修理の項目ごとに、該当する件数を記入したものが表 2-1 である¹⁹⁾。

①全交換に含まれる資料は 14 点で、そのうち 19 世紀以降に出版された資料が 2 点、18 世紀に出版された資料が 12 点である。16、17 世紀の資料は含まれない。また、製本構造は綴じ付けが 10

点、くるみが 2 点、不明が 2 点となっている。

綴じ直しは、折丁全体について行っているものが 4 点、見返し部のみ行っているものが 6 点、行っていないものが 4 点、見返しの修理については、修理の結果、全交換に至っているものが 3 点、一部交換が 4 点、元の見返しを使用しているものが 7 点であった。修復資料全体を通じて、綴じ直しや見返しの修理は、当該部分の劣化状況に応じて行ったと考えられるが、①全交換においては、折丁全体を綴じ直した資料、あるいは見返しを全交換した資料が含まれることが特徴となっている。

見返しの構造に手を加えている可能性のある資料が 10 点含まれるが、うち 7 点を占める綴じ付け資料では、5 点が綴じ見返し、1 点が巻き見返し、1 点が貼り見返しで修理されている。また、1 点のくるみ資料については、巻き見返しで修理されている。これらは、製本構造と見返しの組み合わせから判断して、元の見返しの作りを変更しないか、あるいは不自然な構造とならないことを配慮して修理された可能性が高い²⁰⁾。

そのほか、14 点中 13 点の表紙裏に、金で箔押しされたサイン (写真 3) が見られるが、この特徴は①全交換以外の資料には見られない。



写真 3

②全交換+元表装に含まれる資料は 12 点で、そのうち 19 世紀以降に出版された資料が 3 点、18 世紀に出版された資料が 7 点、17 世紀に出版された資料が 2 点である。また、製本構造は綴じ付けが 8 点、くるみが 4 点となっている。

綴じ直しは、折丁全体について行っているものが 1 点、一部折丁について行っているものが 4 点、見返し部のみ行っているものが 3 点、行っていないものが 4 点、見返しの修理については、修理の結果、全交換に至っているものが 3 点、一部交換

が2点、元の見返しを使用しているものが7点で、①全交換と同様、折丁全体を綴じ直した資料、あるいは見返しを全交換した資料が含まれることが特徴である。

見返しの構造に手を加えている可能性のある資料は7点であるが、うち3点の綴じ付け資料については、2点が綴じ見返し、1点が貼り見返しで修理されている。4点のくるみ資料については、3点が貼り見返し、1点が巻き見返しで修理されており、これについても概ね不自然な改変はされていない。

③部分修理に含まれる資料は5点で、そのうち19世紀以降に出版された資料が1点、18世紀に出版された資料が2点、17世紀に出版された資料が2点である。製本構造は綴じ付けが2点、くるみが2点、リンプ装が1点となっている。

綴じ直しは、一部折丁について行っているものが2点、見返し部のみ行っているものが2点、行っていないものが1点、見返しの修理については、一部交換が3点、元の見返しを使用しているものが2点となっている。③部分修理の資料には、折丁全体について綴じ直しを行った資料は含まれておらず、見返しについても、元の見返しをすべて、あるいは少なくとも一部は残しているのが特徴であろう。

見返しの構造に手を加えている可能性のある資料は5点で、うち2点の綴じ付け資料はいずれも貼り見返し、2点のくるみ資料は貼り見返しと綴じ見返し、1点のリンプ装資料は綴じ見返しで修理されている。綴じ付け資料のうち1点(Menger/Eng.:400)は、元の見返しの遊び紙を、二つ折りにした和紙ののどに貼り付けた上で見返しとして貼付しており、もう1点(Menger/Eng.:720)も同様の修理を行っている。見返しの健全な部分を残すためにこうした修理法をとったものと考えられる。くるみ資料のうち綴じ見返しの1点(Menger/Lat.:17)は、修理の過程で製本を綴じ付けか

らくるみに変更しており、見返し部については綴じ見返しのまま残したものと考えられる。

④修理なしに含まれる資料は6点で、そのうち18世紀に出版された資料が2点、17世紀に出版された資料が3点、16世紀に出版された資料が1点である。製本構造はくるみが1点、リンプ装が5点である。

綴じ直しは、6点とも見返し部のみ行っており、見返しの修理は、一部交換が2点、元の見返しを使用しているものが4点となっている。③部分修理と同様、綴じ直しを最小限に留めており、見返しの修理も全交換したものはなく、元の見返しをすべて、あるいは少なくとも一部を残す形で修理を行っている。

見返しの構造に手を加えている資料は6点で、リンプ装の5点、くるみの1点がいずれも綴じ見返しで修理されている。くるみ資料(Menger/A.D.:183)は、表紙ボード外側に支持体のへこみ痕があることから元は綴じ付け製本であったと考えられ、見返しの構造もそれに由来している可能性が高い。

以上を踏まえて、服部修復資料全体の特徴についてまとめると、第一に、表装の全交換を行っている資料は比較的出版年の新しい資料に多く、出版年の古い資料は、全交換を行っても元表装を貼付して残す、あるいは元表装にたいする部分的な修理に留めている傾向がある。第二に、折丁全体の綴じ直しは、表装の全交換を行っている資料にのみ見られ、表装を部分修理している資料や修理を行っていない資料では、綴じ直しも一部折丁か見返し部のみに留まっている。第三に、見返しの全交換は、表装の全交換を行っている資料にのみ見られ、表装を

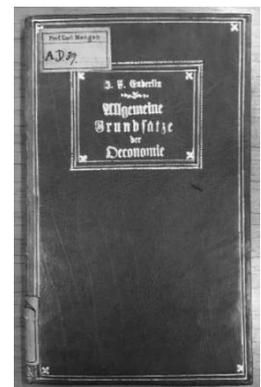


写真4

部分修理している資料や修理を行っていない資料では、元の見返しを一部修理するか、そのまま使用している。ただし、元の見返しは表装の全交換を行っている資料でも使用されている。第四に、見返しの構造修理は、基本的に元の構造を改変しないよう配慮して行われていたと考えられる。第五に、製本構造の改変は最小限に留められている。そのほかの特徴として、表装を交換する際は、半角装の1点を除き、すべて総革装にした上、箔押を施している（写真4）。また、のど部の修理はほとんど行われておらず、それぞれ布と紙で補強をしている2点があるのみである。

こうした特徴から、服部は、対象資料の製作年代や製本構造に応じて、ある程度明白に修理のアプローチを変えていたと考えられる。すなわち、18～19世紀に製作された綴じ付け等の構造をもつ資料にたいしては、比較的大胆に材料等を新しいものに置き換えながら修理を行っているが、17世紀以前に製作されたリンプ装等の構造をもつ資料にたいしては、できる限り元の構造や材料を残す形で修理を行っている。製本構造は、いずれの場合もほとんど改変していない。また、見返しの素材については、表装を全交換している資料でも半数はオリジナルを残しており、見返しの構造修理は資料ごとに対処法を変えていることから、いずれの資料においても、闇雲な改変をとまなう修理は避けていたことが窺われる。

(2) 中林修復資料

中林修復資料の調査点数は30点である（表1-2）。資料の出版年代は、19世紀以降が16点、18世紀が5点、17世紀が8点、16世紀が1点となっている。修復後の製本構造は、綴じ付けが9点、くるみが17点、リンプ装が2点、不明が2点である。

表紙修理のグループ別では、①全交換が8点、②全交換+元表装が15点、③部分修理が6点、④修理なしが1点となっているが、中林修復資料

については、表紙修理のグループごと、あるいは対象資料の出版年代や製本構造に応じた一定の修理の傾向は見出し難かった（表2-2）。

修理の特徴として、見返しについては、30点中22点で全交換を行っており、材料を和紙に変更しているものが多い。構造修理を行っている見返しのうち、22点が巻き見返し、4点が貼り見返し、2点が綴じ見返しもしくは綴じ+貼り見返しとなっており、元の構造に関わらず、巻き見返しを選択して修理を行っているケースが多い。そのほか、表装を全交換する場合はすべて総革装で行っており、また、表紙ボード角を丸める独自の加工を行っている。また、のど部を布、あるいは紙で補修している例が8点含まれる。

Menger/Lat.:268、Menger/Lat.:110など、元の支持体を表紙との接続部でカットした痕跡のある資料が見られ、ほかにも綴じ付け、リンプ装から支持体をカットしてくるみに改変したと思われる資料が複数含まれる。Menger/Lat.:286のように、元の資料になかった白紙葉を大量に綴じ込んだ例（写真5）や、Menger/Eng.:500のように、構造をくるみから綴じ付けに変更した上、偽背バンドを施した例（写真6）など、資料の体裁を大きく変更した例も見られる。

中林修復資料については、元表装を残す修理を一定数行っているものの、製本構造の改変、見返

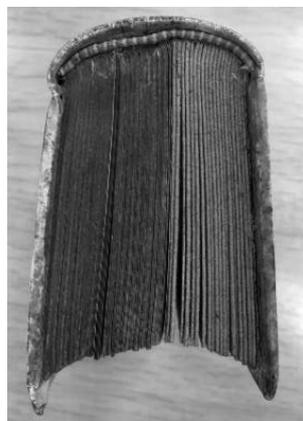


写真5



写真6

し、材料・構造の変更が目立つ。また、修理法についても、資料の材料や構造に応じて選択するというよりも、自身の手法に落とし込んで処置を行っている傾向が強い。

(3) 荒井修復資料

荒井修復資料の調査点数は29点である(表1-3)。資料の出版年代は、19世紀以降が8点、18世紀が14点、17世紀が4点、不明が3点となっている。修理後の製本構造は、綴じ付けが15点、くるみが12点、不明が2点である。

表紙修理のグループ別では、①全交換が10点、②全交換+元表装が14点、③部分修理が5点となっている(表2-3)。

荒井修復資料には、「貴重書製本控」に「(復元)出来る限り元の通りにする」の記載がある一群と、「(改装)」の記載がある一群が含まれる(写真7、8)。記載がない群も含めて、それぞれの群ごとに表装の修理の状態を確認すると、「(復元)出来る限り元の通りにする」の記載がある群は、②全交換+元表装の資料が8点、③部分修理の資料が5点で、①全交換の資料はなかった。「(改装)」の記載がある群は、①全交換の資料が5点、②全交換+元表装の資料が4点であった。記載のない群は、①全交換の資料が6点、②全交換+元表装の資料が1点であった。このように元表装の処置に明白に差が生じていることから、記載の内容は事前に荒井へ指示として伝えられており、荒井はそれに従って修復の方法を決めた可能性が高いと思われる。

修理の特徴として、見返しについては、29点中24点で全交換を行っており、着色あるいは無着色の洋紙に変更している場合が多い。見返しの構造は、2点の綴じ見返しを除き、すべて貼り見返しで修理されており、元の構造に関わらず、貼り見返しを選択して修理しているケースが多いと考えられる。表装を全交換する際に、総革装の装丁が多い服部、中林にたいして、荒井は1点の総革

書名	著者	修復内容	備考
...	A-226 (Hw)	B-51 (Ep)	1 vol
...	A-227	B-29 (Co)	3
...	...	A-47 (An)	1
...	...	A-178 (S)	1
...	...	A-341 (Cp)	1
...	...	B-195 (A)	1
...	...	C-52 (Pa)	1
...	...	A-247 (E)	1
...	...	B-18 (Co)	1
...	...	B-177 (Co)	2
...	...	B-177 (Co)	2
...	...	B-177 (Co)	2

写真7

書名	著者	修復内容	備考
...	A-70 (S)	...	1
...	A-247 (E)	...	1
...	A-247 (E)	...	2
...	1
...	1
...	1
...	1
...	1
...	1
...	1
...	1

70 vols.

写真8

装を除きすべて半角装で行っている。また、表紙が外反りとなっている資料が多数見られるが、表装材と見返しの強度のバランスや接着剤に問題があったものと考えられる。

Menger/Eng.:663 (写真9)、貴A:247は、いずれも支持体を表紙との接続部分で切断の上、くるみに変更したものと考えられる。またそれ以外に、支持体を切断した形跡の残る資料が3点、支持体の切断は確認できないが、綴じ付けからくるみへ改装した可能性が高い資料が3点含まれる。



写真9

荒井修復資料は、まず「改装」あるいは「復元」の指示に沿って、「改装」の場合は材料等を新しいものに交換しながら、「復元」の場合は、特に表装について元の装丁を残す配慮をしつつ修理を行ったものと思われる。ただ

し、「復元」、「改装」のいずれにおいても、資料内部の見返しの素材や構造が改変されているものが多いほか、表紙との接続に係る製本構造を変更した例も散見され、復元の範囲が資料の外形部分に留まっていたことを窺わせる。

4. 修復調査まとめ

ここまでの調査から、修理を担当した製本技術者によって構造改変への考え方、修理の材料、方法等に大きな差異があることがわかった。

表紙部分の修理については、いずれの製本技術者も、元の表装が健全な場合は部分修理に留めるか、元の表装を剥離して新しく作り直した表紙の上から貼付する修理を行っている。一方、表装の全交換を行った場合は、外見で修理者が判別できるほど仕上がりに大きな違いがある。服部、中林はいずれも総革装で仕上げている資料が多いが、服部修復資料には特徴的な箔押が見られ、中林修復資料は角を丸める処理をしているのが特徴である。荒井はほぼすべての資料を半角装で装丁している。

見返し等内部構造の修理については手法の差がさらに顕著になる。服部は見返しの交換を最小限に抑えてオリジナルをできる限り用いようとしているのにたいして、中林と荒井は積極的に交換を進めているように見える。新しい見返しの材料として、中林が和紙を使用しているのにたいして、荒井は洋紙が多い。見返しの綴じ直しはいずれの製本技術者も行っているが、服部は元の構造に忠実な綴じ直しをしているのにたいして、中林と荒井は自身が好む手法で綴じ直しを行う傾向が見られる。

こうした各製本技術者間の手法の違いが、統制されずに修復資料へ直接反映されることになった理由として、修復の方法、材料、元装丁の保存に関する条件や方針を、発注者である図書館が一貫した指示として製本技術者側に明確に示して

いなかった可能性が考え得る。

荒井の担当した一部資料については、修復の進め方を示す「復元」や「改装」の記載があり、これらは実際に荒井へ指示として伝わっていたと考えられる。しかし「復元」や「改装」の具体的な方法や範囲についての記述はなく、また、こうした指示が荒井以外の修理担当者にも出されたことを示す資料は現在のところ見つかっていない。『一橋大学附属図書館史』には、修復に際して「旧態を損なわないように、できるだけ、あるがままの姿に補修再現する」²¹⁾との記述があるが、この原則がどこまで修復資料全体に適用されたのかも判然としない。

当時図書館が、西洋古刊本の保存と修復についてどのような意図と方針を持っていて、それが実際の作業にどのように適用されたかについては、今後解明していく必要があるだろう。

5. おわりに

今回の調査で、諸師と呼ばれる製本技術者たちが、1950年代に西洋古刊本にたいして施した修理の一端を知ることができた。今後、修復に際しての図書館側の意図や方針を明らかにすることで、西洋古刊本にかんする当時の資料保存の実践を総体として理解することが可能となるだろう。

また、今回明らかになった諸師の修復や製本の技術が、わが国の洋装製本技術の系譜にどのように位置付けられるかについては、本稿で触れることができなかった。これについては稿を改めて論じたい。

【謝辞】 修復資料の調査を担当した篠田飛鳥氏からは、調査終了後も修復の特徴等について貴重な助言をいただいた。感謝を申し上げたい。

【附記】 本稿は、JSPS 科研費 16K12543 の助成に基づく研究成果の一部である。

(とこい けいたろう：松山大学経済学部特任准教授)

洋書修理痕調査カルテ(科研費・挑戦的萌芽研究 16K12543)

作業者
 請求記号 Menger
 修復者 荒井 中林 服部
 修復日
 修復者印 スタンプ / 箔押し / その他() / なし
 サイズ H W T

	現状			補修箇所とその劣化
	構造		材料	
表紙 補修 あり / なし / わからない	とじつけ くるみ リンプ その他() わからない 改装前の構造() 芯材:あり/なし		総 / 半 / 半角 タンニン革 / ペラム / トーイング 布 単色紙 / マーブル紙 / その他の装飾紙 その他()	表装全体交換 表装全体交換(旧表装貼り付け) 旧表装:良好 / 劣化 表装部分修理 背 / のど / 表紙 / 角 表紙反り あり / なし
背 補修 あり / なし / わからない	穴あり / 穴無し 芯材:あり / なし			クータ使用 あり / なし / わからない
とじ 補修 あり / なし / わからない	中とじ 背バンドとじ かがりとじ テープとじ 支持体なし ステープラー 仮りとじ その他() わからない	平とじ 打ち抜きとじ からげとじ ミシンとじ ステープラー その他() わからない	麻ひも / 革ひも / 布テープ / 皮テープ / 革テープ その他() わからない 糸 ステープラー その他() わからない とじ糸	支持体交換 あり / なし / わからない 綴じなおし:すべて / 部分
見返し 補修 あり / なし / わからない	とじ 貼り 巻き 複合型 わからない		洋紙 無着色 着色 マーブル紙 その他の装飾紙 和紙	オリジナル使用 すべて交換 部分的に交換 表:効き紙 / 遊び紙 裏:効き紙 / 遊び紙 表紙補修材料による変色 あり / なし
のど 補修 あり / なし / わからない	あり / なし		布 紙 その他()	
中身	折丁 / ペラ		原料:ポロ / バルブ / わからない 性状:すの目あり / なし :無着色 / 着色	

特記事項		
小口	オリジナル / 補修後着色 / わからない 色:金 / マーブル / ベタ / バラ / なし	裁断あり / なし
花布	オリジナル / 交換 / なし	交換後の色:黄赤 / 青白 / その他()
留めひも	オリジナル / 交換 / なし	
その他		

図1

表 1-1 調査資料リスト (服部)

番号	修復日	請求記号		出版年	構造	改装前構造	表装修理	綴じ直し	見返し構造	見返し修理	のど修理	その他	
1	1954/6/30	Menger	A.D.	35	1801	不明		全交換	見返し部	巻き	一部交換	なし	箔押し
2	1954/6/30	Menger	A.D.	44 a	1793?	綴じ付け		全交換	なし	巻き	オリジナル使用	なし	箔押し
3	1954/6/30	Menger	A.D.	45	1786	綴じ付け		全交換	見返し部	巻き	オリジナル使用	なし	箔押し
4	1954/6/30	Menger	A.D.	50	1755	綴じ付け		全交換	見返し部	綴じ	一部交換	なし	箔押し
5	1954/6/30	Menger	A.D.	52	1800	くるみ		全交換	なし	巻き	オリジナル使用	なし	箔押し
6	1954/6/30	Menger	A.D.	90	1764	綴じ付け		全交換	なし	巻き	オリジナル使用	なし	箔押し
7	1954/6/30	Menger	A.D.	127 1	1761	不明		全交換	見返し部	綴じ	全交換	なし	箔押し
8	1954/6/30	Menger	A.D.	127 2	1761	綴じ付け		全交換	見返し部	表:綴じ裏:不	オリジナル使用	あり(紙)	箔押し
9	1954/6/30	Menger	A.D.	127 3	1761	綴じ付け	綴じ付け	全交換	見返し部	綴じ	オリジナル使用	なし	箔押し
10	1954/6/30	Menger	A.D.	135	1737	綴じ付け		全交換	なし	巻き	オリジナル使用	なし	箔押し
11	1954/6/30	Menger	A.D.	289	1781	綴じ付け	綴じ付け	全交換	全体	表:貼り裏:綴	一部交換	なし	箔押し
12	1954/4/23	Menger	Lat	148	1605	リンプ		なし	見返し部	綴じ	オリジナル使用	なし	
13	1954/10/1	Menger	Lat	234	1652	リンプ		なし	見返し部	綴じ	オリジナル使用	なし	
14	1954/10/1	Menger	Lat	228	1705	リンプ		なし	見返し部	表:貼り裏:綴	一部交換	なし	
15	1954/6/30	Menger	A.D.	109	1766	綴じ付け	綴じ付け	交換(オリジナル貼付)	なし	綴じ	オリジナル使用	なし	
16	1954/6/30	Menger	A.D.	183	1664	くるみ		なし	見返し部	綴じ	オリジナル使用	なし	
17	1954/6/30	Menger	A.D.	267	1638	リンプ		不明	見返し部	表:綴じ裏:綴	一部交換	なし	
18	1954/12/27	Menger	Lat	1	1620	くるみ	くるみ	交換(オリジナル貼付)	見返し部	巻き	オリジナル使用	なし	
19	1954/4/23	Menger	Lat	4	1582?	リンプ		なし	見返し部	綴じ	オリジナル使用	なし	
20	1954/4/23	Menger	Lat	17	1692	くるみ	綴じ付け	部分修理	見返し部	綴じ	オリジナル使用	なし	
21	1954/4/23	Menger	Lat	30	1649	綴じ付け	綴じ付け	交換(オリジナル貼付)	見返し部	綴じ	オリジナル使用	なし	
22	1954/10/1	Menger	Lat	257	1714	リンプ		なし	見返し部	綴じ	一部交換	なし	
23	1954/6/30	Menger	A.D.	85	1739	綴じ付け	綴じ付け	交換(オリジナル貼付)	なし	綴じ	オリジナル使用	なし	
24	1954/6/30	Menger	A.D.	261	1669	リンプ	リンプ	部分修理	見返し部	綴じ	オリジナル使用	なし	
25	1954/2/1	Menger	Eng	654	1771	綴じ付け		交換(オリジナル貼付)	見返し部	綴じ	全交換	なし	
26	1954/2/1	Menger	Eng	644	1793	綴じ付け		交換(オリジナル貼付)	なし	貼り	一部交換	なし	
27	1954/2/1	Menger	Eng	400	1728	綴じ付け		部分修理	一部折丁	貼り	一部交換	なし	
28	1954/6/30	Menger	Fr	469	1764	綴じ付け		全交換	全体	綴じ+貼り	一部交換	なし	箔押し
29	1954/2/1	Menger	Eng	415 1	1833	くるみ		部分修理	なし	貼り	一部交換	なし	
30	1954/2/1	Menger	Eng	428	1710	くるみ	綴じ付け	交換(オリジナル貼付)	一部折丁	貼り	全交換	なし	
31	1954/5/14	Menger	Eng	720	1777	綴じ付け	綴じ付け	部分修理	一部折丁	貼り	一部交換	なし	
32	1954/5/14	Menger	Eng	757	1806	綴じ付け		交換(オリジナル貼付)	一部折丁	貼り	全交換	なし	
33	1954/5/14	Menger	Eng	845	1855	くるみ		交換(オリジナル貼付)	一部折丁	貼り	一部交換	なし	
34	1954/2/22	Menger	Eng	1412 1	1776	綴じ付け		交換(オリジナル貼付)	一部折丁	綴じ	オリジナル使用	あり(布)	
35	1954/5/14	Menger	Eng	1415 1	1786	綴じ付け		全交換	全体	貼り	全交換	なし	
36	1954/6/30	Menger	Ges	310	1889	くるみ		全交換	全体	巻き	全交換	なし	箔押し
37	1954/5/14	Menger	Eng	725 3	1831	綴じ付け		交換(オリジナル貼付)	なし	貼り	オリジナル使用	なし	
38	1954/2/1	Menger	Eng	644	1793	くるみ		交換(オリジナル貼付)	全体	貼り	オリジナル使用	なし	

特集「修復痕から製本を読み解く」
1950年代の大学図書館における西洋古刊本の修復
(床井)

表 1-2 調査資料リスト (中林)

番号	修復日	請求記号			出版年	構造	改装前構造	表装修理	綴じ直し	見返し構造	見返し修理	のど修理	その他
1	1954/1/25	Menger	Lat	50	1857	リンプ?		部分修理	見返し部+1折	綴じ+貼り	オリジナル使用	あり(布)	
2	1954/1/25	Menger	Lat	246	1632	綴じ付け		全交換	見返し部+1折	巻き	全交換	なし	
3	1954/1/25	Menger	Lat	268	1568	不明		部分修理	なし	貼り	全交換	なし	支持体カット
4	1954/1/25	Menger	Lat	110	1603	くるみ		全交換	見返し部+1折	巻き	全交換	なし	支持体カット
5	1954/1/25	Menger	Lat	89	1640	綴じ付け		部分修理	なし	貼り	オリジナル使用	なし	
6	1954/2/5	Menger	A.D.	54	1804	くるみ		交換(オリジナル貼付)	見返し部	巻き	全交換	あり(紙)	
7	1954/1/25	Menger	Lat	345	1609	綴じ付け	綴じ付け	全交換	見返し部+1折	巻き	全交換	なし	
8	1954/1/25	Menger	A.D.	3	1779	綴じ付け		全交換	見返し部	巻き	全交換	あり(紙)	
9	1954/1/25	Menger	Lat	286	1672	くるみ	リンプ	全交換	見返し部+追加ページ	貼り	全交換	なし	ページ補充
10	1954/2/5	Menger	A.D.	36	1790	リンプ	仮綴じ	交換(オリジナル貼付)	全体	巻き	全交換	あり(布・紙)	
11	1954/8/7	Menger	Eng	333	1875	くるみ		なし	見返し部	巻き	全交換	なし	
12	1954/8/7	Menger	Eng	1185	1842	くるみ		交換(オリジナル貼付)	見返し部	巻き	全交換	なし	
13	1954/3/5	Menger	Ital	4	1696	くるみ		交換(オリジナル貼付)	見返し部+一部折丁	巻き	全交換	なし	
14	1954/3/5	Menger	Ital	5	1610	くるみ	リンプ	交換(オリジナル貼付)	全体	巻き	全交換	なし	
15	1954/3/5	Menger	Reisen	525	1	1796	くるみ	交換(オリジナル貼付)	見返し部+一部折丁	巻き	全交換	なし	
16	1954/3/5	Menger	Reisen	190	1863	くるみ		交換(オリジナル貼付)	不明	巻き	不明	なし	
17	1954/8/7	Menger	Reisen	782	1827	くるみ		交換(オリジナル貼付)	見返し部	巻き	全交換	なし	
18	1954/3/5	Menger	Fr	1758	1666	くるみ		交換(オリジナル貼付)	全体	巻き	全交換	なし	
19	1954/2/5	Menger	Mon	1173	1847	くるみ		全交換	見返し部	巻き	オリジナル使用	あり(布)	
20	1954/8/7	Menger	Reisen	360	1903	くるみ		交換(オリジナル貼付)	見返し部	巻き	全交換	なし	
21	1954/2/5	Menger	Mon	823	1800	くるみ		交換(オリジナル貼付)	見返し部+1折	巻き	全交換	あり(布)	
22	1954/2/5	Menger	Eng	500	1872	綴じ付け	くるみ	部分修理	見返し部	巻き	全交換	あり(布)	偽背バンド
23	1954/1/22	Menger	Eng	348	1808	不明		部分修理	なし	綴じ	なし	なし	
24	1954/6/8	Menger	Eng	1427	1810	くるみ		全交換	一部折丁	巻き	全交換	なし	
25	1954/6/8	Menger	Eng	1489	1807	くるみ		全交換	一部折丁	巻き	全交換	なし	
26	1954/8/7	Menger	Fr	24	1806	綴じ付け		交換(オリジナル貼付)	なし	綴じ+貼り	オリジナル使用	なし	
27	1954/6/8	Menger	Eng	1501	1768	綴じ付け		交換(オリジナル貼付)	見返し部+一部折丁	綴じ+貼り	全交換	なし	
28	1954/8/7	Menger	Mon	753	1846	綴じ付け		部分修理	全体	貼り	オリジナル使用	あり(布)	
29	1954/8/7	Menger	Reisen	320	1846	綴じ付け		交換(オリジナル貼付)	一部折丁	巻き	全交換	なし	
30	1954/6/8	Menger	Reisen	95	2	1844	くるみ	交換(オリジナル貼付)	一部折丁	巻き	一部交換	なし	

表 1-3 調査資料リスト (荒井)

番号	修復日	請求記号			出版年	構造	改装前構造	表装修理	綴じ直し	見返し構造	見返し修理	のど修理	その他	記載	
1	1955/12/20	Menger	A.D.	268	1723	綴じ付け		交換 (オリジナル貼付)	なし	貼り	オリジナル使用	なし		改装	
2	1955/12/20	Menger	Lat	90	1705	綴じ付け		全交換	一部折丁	貼り	全交換	なし		改装	
3	1955/12/20	Menger	Fr	1700	1751	綴じ付け		交換 (オリジナル貼付)	なし	貼り	全交換	なし		改装	
4	1955/12/20	Menger	Eng	220	1	1804	綴じ付け	交換 (オリジナル貼付)	不明	貼り	全交換	なし		改装	
5	1955/12/21	Menger	Reisen	50	1	1798	くるみ	部分修理	なし	貼り	全交換	なし		復元	
6	1955/12/19	Menger	Jur	215		1857	不明	部分修理	なし	貼り	全交換	なし		復元	
7	1955/4/5	Menger	Jur	44	1	1770	綴じ付け	全交換	見返し部	綴じ	全交換	なし			
8	1955/12/20	Menger	Fr	1359		1690	綴じ付け	全交換	全体	貼り	全交換	なし		改装	
9	1955/12/20	Menger	Eng	1475	1	1767	綴じ付け	交換 (オリジナル貼付)	なし	貼り	全交換	なし		復元	
10	1955/12/19	Menger	Eng	522		1732	くるみ	交換 (オリジナル貼付)	なし	貼り	全交換	なし		復元	
11	1955/12/20	Menger	Eng	663		1715	くるみ	綴じ付け	交換 (オリジナル貼付)	なし	貼り	全交換	なし	支持体カット	復元
12	1955/12/21	Menger	Eng	665		1807	くるみ	交換 (オリジナル貼付)	なし	貼り	全交換	なし		復元	
13	1955/12/20	Menger	Eng	1762		1791	綴じ付け	全交換	なし	貼り	全交換	なし		改装	
14	1955/12/20	Menger	Fr	1694		1767	綴じ付け	綴じ付け	交換 (オリジナル貼付)	なし	貼り	オリジナル使用	なし	復元	
15	1955/12/20	Menger	Fr	1690		1671	綴じ付け	綴じ付け	交換 (オリジナル貼付)	なし	貼り	不明	なし	改装	
16	1955/12/20	Menger	Fr	1740		1691	くるみ	綴じ付け	交換 (オリジナル貼付)	なし	貼り	全交換	なし	復元	
17	1955/12/21	Menger	Reisen	880		1700	くるみ	綴じ付け	交換 (オリジナル貼付)	なし	貼り	全交換	なし	改装	
18		Menger	Eng	1945		1718	綴じ付け	綴じ付け	全交換	なし	貼り	全交換	なし	改装	
19	1959/2/14	Menger	貴A	173	1	1793	綴じ付け	全交換	全体	貼り	全交換	なし			
20	1955/12/20	Menger	貴A	178	1	1849	綴じ付け		部分修理	なし	貼り	全交換	なし	かがり綴じ+からげ綴じ	復元
21	1955/9/23	Menger	貴A	202		1818	綴じ付け		全交換	見返し部	綴じ	全交換	なし		
22	1955/12/20	Menger	貴A	207		1778	くるみ		交換 (オリジナル貼付)	一部折丁	貼り	一部交換	なし	復元	
23	1955/12/20	Menger	貴A	247			くるみ		部分修理	なし	貼り	全交換	なし	支持体カット かがり綴じ+からげ綴じ	復元
24	1959/2/14	Menger	貴A	264		1842	綴じ付け		全交換	不明	貼り	全交換	なし		
25	1955/11/9	Menger	貴A	272		183	くるみ		部分修理	一部折丁	貼り	オリジナル使用	なし	支持体カット	復元
26	1955/12/20	Menger	貴A	340	A	1822	くるみ	綴じ付け	交換 (オリジナル貼付)	不明	貼り	全交換	なし	かがり綴じ+からげ綴じ	
27	1955/12/20	Menger	貴A	537	1		くるみ		交換 (オリジナル貼付)	一部折丁	貼り	全交換	なし	復元	
28	1956/4/21	Menger	貴A	544			くるみ		全交換	全体	貼り	全交換	なし		
29	1955/4/5	Menger	貴A	160		1795	不明		全交換	不明	貼り	全交換	なし		

表 2-1 改装グループ別 (服部)

	点数	出版年				構造				綴じ直し				見返し修理			
		19世紀～	18世紀	17世紀	16世紀	綴じ付け	くるみ	リンプ	不明	全体	一部折丁	見返し部	なし	全交換	一部交換	オリジナル	
①全交換	14	2	12			10	2			2	4		6	4	3	4	7
②全交換+元表装	12	3	7	2		8	4			1	4	3	4	3	2	7	
③部分修理	5	1	2	2		1	3	1			2	2	1		3	2	
④修理なし	6		2	3	1		1	5				6			2	4	

表 2-2 改装グループ別 (中林)

	点数	出版年				構造				綴じ直し				見返し修理			
		19世紀～	18世紀	17世紀	16世紀	綴じ付け	くるみ	リンプ	不明	全体	一部折丁	見返し部	なし	全交換	一部交換	オリジナル	なし
①全交換	8	3	1	4		3	5			8				7		1	
②全交換+元表装	15	8	4	3		3	11	1		3	2	8	1	12	1	1	
③部分修理	6	4		1	1	3		1	2	1		2	3	2		3	1
④修理なし	1	1					1					1		1			

表 2-3 改装グループ別 (荒井)

	点数	出版年				構造				綴じ直し				見返し修理			製本控記載			
		19世紀～	18世紀	17世紀	16世紀	綴じ付け	くるみ	リンプ	不明	全体	一部折丁	見返し部	なし	全交換	一部交換	オリジナル	復元	改装	なし	
①全交換	10	2	6	1		8	1		1	3	1	2	2	10					4	6
②全交換+元表装	14	3	7	3		6	8				2		10	10	1	2	8	5	1	
③部分修理	5	3	1			1	3		1	1		4	4		1	5				
④修理なし																				

- 1) 小島浩之「資料保存の考え方：現状と課題」『情報の科学と技術』60 (2)、2010年、44頁。
- 2) 保存ニーズは、利用を前提とした資料保存のための評価指標である。「モノとしての状態」、「現物として残す必要性」、「利用の頻度」の三要素を組み合わせることで資料の保存ニーズをはかり、保存の方法の検討や優先順位付けにつなげることを目的とする。小島浩之「資料保存の考え方：現状と課題」43頁。
- 3) 本稿では、洋書のなかでも、概ね19世紀以前の手引き印刷本で、手かがり製本された資料を西洋古刊本と呼ぶ。
- 4) 諸師は、諸製本(もろせいほん)を行う製本技術者を指す。諸製本は、注文者の好みや指定に従って一冊一冊個別に行う製本で、書物の購入者の好みに応じて仮とじの本を革製本に仕立て直すことや、図書館の指定に従って雑誌を合本すること、修理のための再製本などが含まれる。図書館製本ともいう。日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』第4版、丸善出版、2014年。
なお、諸師にたいして、印刷業者の注文で大量生産を行う技術者を教物師(かづものし)と呼んだ。古典社編『書物語辞典』古典社、1939年、25頁。
- 5) 東京大学経済学部には、所蔵するアダム・スミス文庫を1950年代に修理した際の覚書が残されている。この覚書には、修理を担当した服部政祐による作業の手順などが記述されており、諸製本の技術についての数少ない貴重な資料となっている。森脇優紀、福田名津子校注；小島浩之解題『1950年代のアダム・スミス文庫に関する覚書』校注『東京大学経済学部資料室年報』第9号、2018年、15-38頁。
- 6) 1907年に編纂された東京高等商業学校の洋書蔵書目録 *Catalogue of Foreign Books* には、6,103タイトルが掲げられている。杉岳志「東京高等商業学校の蔵書構成の変遷」『一橋大学附属図書館研究開発室年報』2号、2014年、10頁。その後、ギールケ文庫(1921年購入)、メンガー文庫(1922年購入)など、数万点規模の文庫が相次いで購入されたことで、古刊本を含む洋書の所蔵数は急速に増加していった。
- 7) 一橋大学編『一橋大学附属図書館史』一橋大学、1975年、69-71頁。
- 8) 一橋大学は、西洋古刊本の保存と研究を目的として社会科学古典資料センターを1978年に開設し、学内で所蔵する1850年以前に出版された洋書を一括してセンターに移管した。この時、関係する事務書類も多くがセンターに移管された。
- 9) 『一橋大学附属図書館史』には、メンガー文庫修復を服部と中林の二名が担当したことが明記されている。服部が修復を行った資料の一部は、現物に残る箔押のサインから判明するが、これらの資料はすべて貴重書製本控の無記名のパートに記載されている。また、無記名のパートに記載されている資料は、納品日と数量が、製本簿の荒井発注分と一致しており、実際は服部が修復を行った分が、製本簿上は荒井の名前で記載されているものと考えられる。

製本簿に服部の名前が記載されていない理由として、推論の域を出ないが、個人で活動していた服部への支払いに何らかの手続き上の支障があり、便宜的に既に取引のあった荒井製本所への支払いの形で処理をしていた可能性がある。なお、『一橋大学附属図書館史』には、(服部が一橋で仕事をするにあたり)新井(荒井の誤記か。注11参照)が服部を後援したとの記述があり、これに関連しているかもしれない。一橋大学編『一橋大学附属図書館史』70-71頁。

- 10) 一橋大学編『一橋大学附属図書館史』70頁。
- 11) 荒井鎮六の経歴および荒井製本所については、森脇優紀・小島浩之両氏が佐藤守男氏(元東京大学附属図書館職員)から聞き取り調査(2019年4月19日)を行った。それによれば、最盛期は10人近くの職人を抱えて、学内のみならず他大学の貴重書の製本や修理も、東大の製本所内で行っていたという。なお、『一橋大学附属図書館史』には「東大図書館の新井製本所」が修復事業の様々な面に関わった記述があるが、聞き取りの内容からも荒井製本所の誤りと思われる。おそらく執筆者である川崎操の記憶違いから、「荒井」を「新井」と誤記したものであろう。
- 12) 一橋大学編『一橋大学附属図書館史』70-71頁。
- 13) そのほか谷川、岩井も、中林、荒井と同様、諸製本に通じた製本技術者と思われるが、詳しいことは確認できなかった。
- 14) 調査は、2017年8月1日から9月22日にかけて、一橋大学社会科学古典資料センターで行った。調査者は、社会科学古典資料センター保存修復工房の篠田飛鳥氏である。
- 15) 「一般貴重書」は社会科学古典資料センターで用いられている資料区分で、1850年以前に出版された洋書のうち文庫等に含まれていないものがここに区分される。
- 16) カルテの基本的な様式は、社会科学古典資料センター保存修復工房において用いられている「保存カルテ」を参考にしている。ただし、「保存カルテ」は、資料の状態を把握した上で補修の要否を検討することが目的であるため、構造と材料に加えて劣化状態の記録が大きな部分を占めている。一方、「洋書修理痕調査カルテ」は過去の修理の様態を把握することが主目的のため、劣化状態の記録は最小限に留めて、修理の箇所と方法を詳しく記録する形をとっている。一橋大学の「保存カルテ」については以下を参照。石井健「調査と計画」増田勝彦、岡本幸治、石井健『西洋古典資料の組織的保存のために：第1回西洋古典資料保存講習会から』(『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』47号)、2001年、11-25頁。
製本構造の用語や考え方については以下の記述に倣っている。岡本幸治「保存情報としての製本構造(1)：西洋古典資料の保存のために」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』20号、2000年、25-31頁、岡本幸治「保存情報としての製本構造(2)：西洋古典資料の保存のために」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』21号、2001年、44-48頁。
- 17) 表紙の修理については、本来、表装部分だけでなく表紙ボードの修理や交換についても見るべきであるが、今回は詳しく調査できなかった。
- 18) 本稿でいう「綴じ直し」は、折丁全体を綴じ直すことだけでなく、糸を継いで一部折丁のみを部分的に綴じ直すケースも含む。
- 19) Menger/A.D.:267は表装修理の詳細が不明のため、表2-1に含めていない。
- 20) 綴じ付け製本の見返しは綴じ見返しが原則であり、くるみ製本の見返しは貼り見返しの場合が多く、巻き見返しが用いられることもある。岡本幸治「保存情報としての製本構造(1)」30頁、岡本幸治「保存情報としての製本構造(2)」46頁。リンプ装の見返しはバリエーションに富んでいるが、綴じ見返しと巻き見返しが見られる。J.A. Szirmai, *The archaeology of medieval bookbinding* (London: Routledge, 2016), p. 312-313.
- 21) 一橋大学編『一橋大学附属図書館史』70頁。